

第6節 飛躍する長崎県

MEMO



1 平和都市長崎

(1) 原爆のつめあと

1945（昭和20）年8月9日午前11時2分、アメリカの爆撃機^{ばくげき き}が落とした一発の原子爆弾^{ばくたん}で長崎の町は、浦上を中心^{せんめつ}にほぼ全滅の被害^{ひがい}を受けた。

松山の爆心地^{ばくしんち}から半径1 km以内の建物は、風速160m以上の爆風^{ばくふう}を受けてことごとく倒され、1,800度をこす熱線によって全焼した。中心地から半径1 km以内に住んでいた人々は、その場でほとんどが即死^{そくし}した。半径2 km以内にいた人々は一部は即死し、大部分は重傷を負った。軽傷の人々も熱線でひふは焼けただけ、強い放射線^{ほうしゃせん}をあびた。そのため、後に原爆症^{げんばくしょう}でなくなったり、長く苦しめられたりすることになった。



被爆直後の浦上

(長崎原爆資料館所蔵)

死者	73,884人	罹災戸数 ^り	18,409戸	重軽傷者	74,904人
全焼	11,574戸	罹災人員 ^り	120,820人		

(注) 通勤者・軍隊・旅行者その他実数のわからないものも多く、正確な被害実数は不明である。

原爆による被害（長崎原爆資料館資料から）

MEMO

当時、小学校2年生だった越田富美子さんの手記

一面、焼野原で住む家もなく、防空^{ぼうくう}ごうですごしました。母も両手両足、背中じゅう大やけどしていました。わたしの下の弟二人と妹が、倒れた家の下じきになり、母と兄が一生けんめい助けようとしてましたが、火の手がどんどんせまってきて、ついに助け出すことができなかったそうで、母は一晩中、「子供たちが助けを求めて呼んでいる！」と動けない体をのり出しては泣いていました。

父は、「罪もない子供三人も焼きこして、戦争がにくい!!」と言って焼けあとから弟たちの骨をくるとたようにほりだしていました。

長崎県教育委員会発行『わたしたちの郷土』から



(2) 平和都市長崎へ

原爆で生き残った人々の中には、住む家もなく、食べるものもない長崎から、諫早、島原、五島などへ移って行く人もいた。

一方、長崎にとどまった人は、夜つゆをしのぐだけのそまつな小屋を建てて生活を始めたが、みんな昔のように文化のかおりがただよう町にしたいと願っていた。それとともに、原爆のおそろしさを体験した市民は、戦争のない平和な世の中をつくりたいという強い願いをいただいていた。

この長崎市民の願いは政府を動かし、1949（昭和24）年、国会において「長崎国際文化都市建設法」という法律が作られた。被爆^{ひばく}4周年を迎えたこの年の8月9日、長崎市は爆心^{ばくしん}地で平和祈念^{きねん}式典をおこない、平和宣言をした。この宣言で、長崎の復興^{ふっこう}をちかい、「世界平和の原動力として、全世界に誇る文化と平和の象徴都市を建設する」方針を示した。

この方針にしたがい、道路、水道、住宅、学校などの建設が始まった。平和公園建設事業も進められ、爆心地を中心にして、平和公園や国際文化会館、総合運動公園などの施設^{しせつ}が整っていった。1955（昭和30）年には、長崎国際文化センター建設計画が立てられ、県立長崎図書館



平和祈念式典

(提供:長崎市)

みんなで考えてみよう!

平和祈念像を制作した
北村西望について調べて
みよう。

郷土の偉人 P166~167

MEMO

や美術博物館、市公会堂などが建てられた。

このようにして長崎市は、歴史的な大惨禍に見まわれながらも、平和都市として生まれかわっていった。

(3) 平和は長崎から

「長崎市を最後の被爆地に」という願いは、平和祈念碑や原爆遺構などを残すことにあらわれている。また、世界各国へ平和宣言文を送付したり、核実験への抗議をおこなったりしている。被爆者の中には、自らの被爆体験をもとに核廃絶と平和を国連で訴えた人もいる。

1989(平成元)年、長崎市は「市民平和憲章」を作り、市民一人一人が世界の平和のために行動することをちかっ

た。長崎県も1990(平成2)年に、「自由と平和の尊厳に関する長崎県宣言」を表明している。

戦後60周年にあたる2005(平成17)年、長崎県では、「長崎県平和発信事業」を長崎市と協力しながら実施し、既存の映像を活用した「被爆の実相」をDVD化し、県内全ての学校及び九州、中国、四国を中心に全国へ発信した。

◎長崎市民平和憲章

私たちのまち長崎は、古くから海外文化の窓口として発展し、諸外国との交流を通じて豊かな文化をはぐくんできました。

第二次世界大戦の末期、昭和20年(1945年)8月9日、長崎は原子爆弾によって大きな被害を受けました。私たちは、過去の戦争を深く反省し、原爆被爆の悲惨さと、今なお続く被爆者の苦しみを忘れることなく、長崎を最後の被爆地にしなければなりません。

世界の恒久平和は、人類共通の願いです。

私たち長崎市民は、日本国憲法に掲げられた平和希求の精神に基づき、民主主義と平和で安全な市民生活を守り、世界平和実現のために努力することを誓い、長崎市制施行百周年に当たり、ここに長崎市民平和憲章を定めます。

- 1 私たちは、お互いの人権を尊重し、差別のない思いやりにあふれた明るい社会づくりに努めます。
 - 1 私たちは、次代を担う子供たちに、戦争の恐ろしさを原爆被爆の体験とともに語り伝え、平和に関する教育の充実に努めます。
 - 1 私たちは、国際文化都市として世界の人々との交流を深めながら、国連並びに世界の各都市と連帯して人類の繁栄と福祉の向上に努めます。
 - 1 私たちは、核兵器をつくらず、持たず、持ちこませずの非核三原則を守り、国に対してもこの原則の厳守を求め、世界の平和・軍縮の推進に努めます。
 - 1 私たちは、原爆被爆都市の使命として、核兵器の脅威を世界に訴え、世界の人々と力を合わせて核兵器の廃絶に努めます。
- 私たち長崎市民は、この憲章の理念達成のため平和施策を実践することを決意し、これを国の内外に向けて宣言します。

平成元年3月27日

◎自由と平和の尊厳に関する長崎県宣言

～核兵器の廃絶を願って～

子孫に美しく豊かな地球を引き継ぐことは、今を生きる私たちに課せられた責務である。

しかしながら、この世界は、今なお戦乱、飢餓、地球的規模で進む環境汚染など多くの課題に直面している。

殊に、被爆体験をもつ私たち長崎県民は、人類を破滅させて余りある核兵器の存在に重大な関心を有している。

私たちは、自由で平和な社会を実現してきたところであり、この成果を誇りとし、世界のために貢献したいと考えるものである。

今日、世界は、不信と対決の時代から、対話と協調の時代へと転換しようとしている。

ここに、私たちは、全人類の自由と幸福並びに世界の恒久平和の実現をめざすため、国の堅持する非核三原則のもとに核兵器の一日も早い廃絶を願い、「自由と平和の尊厳に関する長崎県宣言」を行う。

平成2年12月17日 長崎県

MEMO



長崎原爆資料館と長崎市平和会館

(提供:長崎県観光連盟)

長崎市では、いろいろな事業を進めたが、長崎原爆資料館の建てかえもその一つである。屋外に置かれていた原爆遺構も室内に展示され、体験的に原爆に関する学習ができるコーナーもつくられた。

さらに、長崎県では国際平和に関するシンポジウムを開くなどして、世界の平和に向けての新たな取組を始めている。



2 世界と手を結ぶ長崎県

(1) 友好の輪を広げる



主な姉妹・友好都市 (2021年5月現在)

みんなで考えてみよう!

私たちが住むまちが、
どの都市と姉妹友好
都市となっているか
調べてみよう。

MEMO

長崎は、古くから海外との交流が盛んな地域であった。このことより、長崎県では、歴史的に関係の深い外国の自治体と様々な交流を行ってきた。特に、中国の福建省、上海市、湖北省、韓国の釜山広域市、オランダのゼーランド州とは姉妹・友好都市として提携している。（中国、韓国との交流については、130～131ページ参照）さらに、近年は、ベトナムとの交流も深まっており、平成29年6月には、ベトナム中部のクアンナム省との間でも、友好交流関係が結ばれた。

また、県内の各市町においても、国際交流活動は積極的に進められている。その内容は、姉妹・友好都市の縁組みや、親善使節の相互訪問、留学生の交換、ホームステイ、文化やスポーツの交流など多様であり、それぞれの市町において特色ある取組が行われている。

【コラム】長崎とベトナムとの歴史的関係

～ アニオー姫と御朱印船 ～



(提供:長崎県観光連盟)

左の写真は、長崎くんちにおける本石灰町（もとしっくいまち）の出し物「御朱印船」です。この御朱印船の船首部分には、かわいい男の子と女の子が仲良く乗っていますが、これは、荒木宗太郎とその妻アニオー姫を表したものです。

す。アニオー姫と御朱印船。その関係を探りましょう。

荒木宗太郎は、熊本県の出身ですが、後に長崎に移り住み、シャム（タイ）、コーチ（ベトナム中部）などに赴いて朱印船貿易を行った貿易商で、巨万の富を築いたといわれています。1619年にコーチに渡ったとき「安南国王」（広南阮氏）の娘、王加久戸売（わかくとめ）を妻とし、長崎へ迎えました。おそらく国際結婚をして国王の娘を日本に連れてきたのは彼が初めてだろうといわれています。

王加久戸売は当時、長崎の町民に「アニオーさん」と呼ばれ親しまれていました。なぜアニオーさんと呼ばれたか、その理由には諸説あるようです。長崎くんちでの本石灰町の出し物「御朱印船」は、荒木宗太郎とアニオー姫のベトナムからの航海を経て長崎に入港する様子を表したものです。